

## ぼくのお兄ちゃん

相原直あい はら なお

「ガシャーン。パリーン。」

やってしまった。でも、頭がまっ白で動けなかった。お兄ちゃんの声で気がつく。麦茶を入れる容器をわってしまったのだ。

「直ちゃん、何しとるんね。けがはないん。」

お兄ちゃんが、いろいろ言ってくれるが、ぼくは何もできなかった。お兄ちゃんに言われ、ぼくははなれて座って待っていた。お兄ちゃんは、紙袋にわれたものを入れてもう一度それをビニール袋に入れた。すごく手ぎわが良くて、しゅんお母さんのように見えた。その後、気をつけるように注意された。そしてけがをしないで良かったよ。とも言ってくれた。そのしゅん間、ぼくは、すこくなみだが出てきてしまった。お兄ちゃんは、

「後で、わっちゃったこと、お母さんに一緒にあやまろうね。」

と言った。お母さんは、帰ってすぐにわれた器に気がついた。お兄ちゃんが事情を説明してくれた。お母さんは、

「大変だったね。ケガがなくて、良かったよ。角に置いてたからひつかかったね。ごめんね。」

と言った。また、お母さんは、お兄ちゃんに、

「ありがとう。」

たりしなかった。

お兄ちゃんは二人いるんじゃないかと思う時がある。一人はこの目のように優しく、ぼくを助けてくれる。もう一人は、ぼくとけんかをするお兄ちゃん。ぼくは一人目のお兄ちゃんは大好きだけど、二人目のお兄ちゃんのことには、すこくきらい。ぼくは、けんか中、何度も、

「お兄ちゃんなんか大きらい。」

と言つてやる。でも不思議で、お兄ちゃんからきらいと言われたことがない。ぼくは、お兄ちゃんとけんかした日、お母さんに言った。お母さんがその時ぼくが知らない、ぼくの産まれる前のお兄ちゃんのことを話してくれた。

「お兄ちゃんは、すこく甘えん坊だったんだよ。でも直ちゃんのおかげで、お兄ちゃんになれたんだよ。」

と教えてくれた。ぼくは、ぼくよりも小さいお兄ちゃんを想ぞうした。小さいのに、お兄ちゃんになるぞと決意したお兄ちゃんは、すこくかわいしいし、かっこいいと思った。

これからもまた、けんかをしてしまうと思う。でも、お兄ちゃんのことには、やつぱり大好きだ。ぼくは、お兄ちゃんのように、困っている人に優しくできる人になりたい。

お兄ちゃん、ぼくのお兄ちゃんになってくれてありがとう。